

平成26年度

目的に応じて、文章全体から内容を把握し、自分の考えを広げるとともに
書き手の意図や思考を想定して表現技法に気づき自分の表現に活用できる
「生きてはたらく言語力」を育てる。

ー学んだことを生かして、読んだり書いたり話し合ったりできる子どもー

○〈文学的な文章〉

作家にちょうせん！ ふしぎな世界の物語を書こう

（教材名：「注文の多い料理店」「ふしぎな世界へ出かけよう」東京書籍5年下）

○〈文学的な文章〉

登場人物の変化をとらえ、人物関係図をもとに感想文に表そう

（教材名：「海のいのち」東京書籍6年下）

5年 国語科学習指導案

指導者 大阪市立淀川小学校

1. 日時 平成26年10月9日(木) 6時間目(14:50～15:35)
2. 学年・組 第5学年1組 在籍 35名
3. 単元名 「作家にちょうせん! ふしぎな世界の物語を書こう」
(「注文の多い料理店」宮沢賢治 「ふしぎな世界へ出かけよう」東京書籍 5年下)

4. 付けたい言語の力とそれにふさわしい言語活動

本単元で付けたい言語の力を、「C読むこと」の指導事項エ「登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめること」、「B書くこと」の指導事項イ「自分の考えを明確に表現するため、文章全体の構成の効果を考えること」とする。この力を付けるために、作者の表現の工夫や構成を読み取り、ファンタジー作品を書く言語活動を設定する。本単元で扱う教材文「注文の多い料理店」では、「登場人物の人柄、行動や心情」「会話文」などに着目したり、構成をとらえたりする。この学習を通して、ふしぎな世界と現実を行き来するファンタジー作品を書く言語活動を設定する。そうすることで、自分のファンタジー作品を書く時に生かすことができると考える。

5. 単元間の関連と系統

前単元(5年・7月)

本単元(5年・9月)

次単元(5年・12月)

物語のおもしろさを読み取ろう
「世界でいちばん
やかましい音」
○ 「設定」「展開」「山場」「結
末」の部分を確認しながら読
み、物語の構成をとらえる。

作家にちょうせん! ふしぎ
な世界の物語を書こう
「注文の多い料理店」
○ 物語を読んだことを生か
して、物語の設定や内容を考
え、ファンタジー作品を書
く。

物語からのメッセージを受け
取ろう
「大造じいさんとがん」
○ 動物と人間のかかわりを
描いた本を読み、主題をまと
める。

6. 学習目標

- 読み取った作者の表現の工夫を生かして、自分で書いたファンタジー作品を読み合い、ファンタジー作品のおもしろさを味わう。
- ・ 物語の表現の工夫や展開、人物の心情の変化をとらえることができる。
- ・ 作者の表現の工夫を生かして、ファンタジー作品を書くことができる。

7. 評価規準

国語の関心・意欲・態度	読む能力	書く能力	言語についての知識・理解・技能
<ul style="list-style-type: none"> ・ 目的に応じ、内容や要旨をとらえ、自分の考えを明確にしながら本や文章を読もうとしている。(Cカ) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 目的に応じて作者の表現の工夫をとらえ、文章を読んで考えたことを発表し合い、創作に生かしている。(Cウ) ・ 登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめようとしている。(Cエ) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の考えを明確に表現するために文章全体の構成の効果を考えている。(Bイ) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 作者の表現の工夫を理解している。(イ(ケ))

8. 指導にあたって

【児童観】

「読むこと」では、前单元「世界でいちばんやかましい音」で、「設定」「展開」「山場」「結末」の部分を確かめて、物語の構成をとらえる学習をした。4つの部分には、どんなことが書かれているのかを教科書のてびきから学び、本文でその部分にあたるのはどこなのかを読み取っていった。物語がどのような構成でできているのかを確かめることで、物語全体の構成がとらえやすくなった。この学習は本单元のファンタジー作品を作る上で、重要な事柄になる。学んだことを教室に掲示し、振り返れるようにしておく。その他にも、登場人物の人物像や相互関係をとらえる学習活動を行った。登場人物の人物像をとらえ、ある出来事がきっかけで、心情の変化があったことは読み取ることができた。しかし、それを叙述に基づいて説明することが難しい児童がいる。どうしてそう思ったのか、本文に戻り、根拠を考えて説明する活動が必要である。

「書くこと」では、1学期に「本に親しもう」の单元で、自分が読んだ本の中からおすすめの本を選び、本の帯を作って、本を紹介しようという取り組みをした。実際に、本についている帯のモデルを見せ、どのように帯の文章を書いたら、その本を読みたいという気持ちになるのか考えた。取り組んでいく中で、本の内容や特徴を短い言葉でまとめるという活動が、難しい児童が多くみられた。一文が長かったり、時系列が整理されていなかったりする児童がいた。そこで、書いたものを友達と評価しあい、どうしたらもっといい帯になるのかを考えながら進めていった。「立場を明確にして書こう」の单元では、問題に対して賛成か反対かの立場を明確にして、意見文を書くという活動をした。自分の意見が分かりやすく伝わるように、意見文の構成を教科書の文を参考にして考えていった。意見と理由を整理して書くということ、理由を書くときはより説得力が増すように具体例を入れて書くということを学習した。本学級では、「学校には制服を着ていくべきである。」という意見に対して、意見文を書いていった。まず、自分の意見を述べ、次に具体例を含んだ理由をいくつか述べ、最後にまた意見をいうという構成で考えた。「まず」「次に」「それから」「このような理由から」などの接続語を上手に使うことで意見文を書くことができた。今回は構成がはっきりしていたので、ほとんどの児童が意見文を書くことができたと考えた。構成から自分で書くという時に、今回の意見文の書き方を参考に書くことができるよう、支援していきたい。

「話すこと・聞くこと」では、1学期に「意見とその理由を聞き取ろう」という单元で、相手の意見をメモしながら聞くという活動をした。始めは、話している言葉を全部書こうとする児童が多くみられた。上手にポイントだけを箇条書きでまとめている児童のメモを取り上げ、全体に広めると、落ち着いて聞きメモすることができる児童が増えた。しかし、大事な意見を聞き落としてメモできない児童もまだいる。朝の会などで、ゲーム感覚で聞き取りメモの練習をしていき、慣れるようにしたい。「パネル討論をしよう」という单元では、メッセージに対する自分の考えを理由・具体例と合わせてノートに書き、意見を発表する活動をした。意見を発表する時は、ノートを見ながら、声の大きさに注意して、はっきりと伝えることができた。しかし、いくつかの意見を発表し、グループや全体で話し合うという時に、司会を中心に進めていくことがまだ難しい。そこで、各グループの司会の児童に「話し合いの進め方」という手引きを持たせるようにした。それを見ながら、進めていき、慣れてきたら、手引きがなくても話し合いを進められるようにしていきたい。

【单元観】

本教材「注文の多い料理店」は、登場人物の心情の変化や題名のつけ方、オノマトペ、「…」を使った心情などの表現の工夫を見つめることができやすい。また、文章の構成やふしぎな世界への入り口と出口がとらえやすいという特徴がある。このことから、児童が本教材で登場人物の心情を読み取るとともに、実際に「現実—ふしぎな世界—現実」の構成でファンタジー作品を創作することにつなげていくことができやすい教材であると考えた。

そこで、指導にあたっては、「ふしぎな世界へ出かけよう」（東京書籍5年下）の单元と合わせて取り組むようにする。そして、「作家にちょうせん！ ふしぎな世界の物語を書こう」という单元を通した言語活動を設定して、目的意識をもって学習に取り組ませる。

そのことによって、本单元で学習した構成をつかって、自力でファンタジー作品を書くことが期待できる。また、一人一人の感じ方について違いがあることを理解して、多様なものの見方を身に付けることが

できると考えられる。

【指導観】

第Ⅰ次の1時間目では、この学習で最終的にどんな言語活動をするのか、それまでの学習の見通しを伝える。「作家にちょうせん！」と伝え、作家になるために、「注文の多い料理店」を読み進めていくことで、より興味関心を高めさせたい。そして、「ふしぎな世界へ出かけよう」（東京書籍5年下）を読んだり、「大阪の子」の過去の作品であるファンタジー作品を紹介したりしてファンタジー作品のモデルを示す。学習の最後には、ファンタジー作品を書き、その作品を学校図書館に置き、他学年の児童にも読んでもらおうという見通しを持たせる。特に4・6年には感想などを書いてもらい、交流するということを伝える。自分の作家活動に生かすために、並行読書（主にファンタジー絵本）を読み進めていく。並行読書として取り扱う絵本は、以下の23点である。どの絵本も、現実からふしぎな世界に入っていく内容である。どんなふしぎな世界があるのか、この表現はおもしろいなどの感想を並行読書カードに書いていく。

- 1、『おふろだいすき』2、『おいしいのぼうけん』3、『じごくのそうべい』4、『もりのなか』
- 5、『かいじゅうたちのいるところ』6、『つり橋わたれ』7、『きつねの窓』
- 8、『めっきらもっきら どおんどん』9、『ふしぎなエレベーター』10、『きつねのかみさま』
- 11、『モーリッツと空とぶ船』12、『おちやのじかんにきたとら』13、『おふろおばけ』
- 14、『とぶ』15、『まほうのえのぐ』16、『トイレにいいですか』
- 17、『メッセージりのき』18、『ベンおじさんのふしぎなシャツ』
- 19、『ゆうすげ村の小さな旅館』20、『おつきょちゃんとかっぱ』21、『みずたまり』
- 22、『いっぽんみちをあるいていたら』23、『しましまのティーシャツをきてみたら…』

また、読み取りの土台となる事柄についての「一人学びノート」を手がかりに、意味調べ・登場人物・物語の構成・設定など児童自身の力で読み進める活動を2時間行う。指導者は、このノートを見てあらかじめ児童の書いた内容を確認しておく。「一人学びノート」を用いて読み取ったことが、第Ⅱ次の学習の土台となるようにする。第Ⅰ次の4・5時間目に、自分のファンタジー作品のおおまかなあらすじや構成を考えるようにする。まずは「設定」と「結末」を考え、「〇〇が〇〇によって〇〇になる話」というまとめ方をさせる。「注文の多い料理店」を読み進めていく前に、自分の作品のおおまかなあらすじができていくということで、教材文を読みながら自分の作品を見直し、作品をよりよいものにしやすいと考える。

第Ⅱ次の1時間目では、「注文の多い料理店」のおおまかなあらすじを理解し、物語の構成をとらえる。ここで、ふしぎな世界の入り口と出口の表現「風がどうとふいてきて、草はザワザワ、木の葉はカサカサ、木はゴトンゴトンと鳴りました。」をおさえる。この物語では、「風」がふしぎな世界へ引き込むきっかけでもあり、現実の世界にもどす役割も担っていることをとらえさせたい。そして、自分だったら、どんなファンタジー作品を書くかを考えるようにする。第Ⅱ次の2時間目では、物語の最初と最後の場面を比べて読み、変わったところと変わらなかったことを考えさせる。そして、これまでの読書体験や辞書的な意味などから、本来の紳士と「二人のしんし」の違いをおさえ、「二人のしんし」の性格をとらえるようにする。この二つの「比べる」「定義付ける」思考を働かせることによって宮沢賢治が、物語にこめたメッセージを理解させたい。3時間目では、扉をもとに、二人の会話文から紳士の心情の変化をとらえるようにする。心情曲線を使い、中心人物の心情の変化をとらえるようにする。4時間目では、山場を読み取るために「二人のしんしはどこで、食べられると気がついたか」という課題を設定する。この時、会話文から心情をとらえることで、じわじわとせまる恐怖感の書き方に気づかせる。5・6時間目は、物語のしかけ、表現の工夫を読み取らせたい。特に、5時間目は、戸の言葉・色、置いてある物などに着目し、6時間目は、叙述から表現の工夫を見つけ、自分の作品に生かすことができるようにしたい。7時間目は、第Ⅱ次2時間目の二人の紳士が変わったところと変わらなかったところを再度検討してから、物語のどの部分から、どのようなメッセージを受け取ったかを考えさせたい。

第Ⅱ次では、授業で学んだことで、自分がファンタジー作品を書くときに生かせそうなことをストーリーノートに書きためていく。そして、自分のファンタジー作品の内容を考える時間を、授業の残り数分程度に設定する。（この時間を「作家の時間」とする。）学習したことを、創作の過程にすぐに生かせるよう

にしたい。

第Ⅲ次では、第Ⅱ次で、書きためてきた「ストーリーノート」を完成させて交流させる。ペアで「設定」「展開」「山場」「結末」の4つの部分が成り立っているかどうかを確認し、おおまかなあらすじを伝え合わせる。そして、「ストーリーノート」を基に、ファンタジー作品を書き進めさせたい。書き終わったら、グループで読み合い、工夫しているところについて相互評価をする。クラス全体で交流を行ったあと、4年生や6年生に読んでもらう準備をする。他学年に読んでもらい、感想をもらうことで、自分が創ったファンタジー作品を客観的にみるようにさせたい。

「ストーリーノート」を使ってファンタジー作品を書く活動でつけたい言語の力として以下のようなものがある。

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">1. 文学的な文章のよさをとらえて、自分のファンタジー作品に生かす。2. 物語の構成をとらえることで、伝えたいメッセージを伝えることができる。3. 交流することによって、物語のおもしろさや表現の工夫に気づき、自分で書くファンタジー作品に生かすことができる。4. 書いたものの意図を伝えたり、友だちが書いたよさを見つけたり、助言し合えたりすることができる。 |
|--|

9. 「交流の場」における支援のあり方

第Ⅱ次「グループ交流」

- ① 戸の言葉や会話文をもとに、「二人のしんし」と山猫たちの心情をノートに書く。
- ② ペアやグループで交流することにより、自信がもてるようにする。

第Ⅲ次「ファンタジー作品を読み合う」

- ① グループの友達のファンタジー作品を読み、表現の工夫やおもしろいところを紹介する。
- ② グループで選んだ代表のファンタジー作品を読み、全体の場でどんな表現の工夫を入れて書くことができているか意見を交流する。

10. 学習指導計画（全15時間）

次	時	学習活動	支援のあり方（発問・助言・補説 等）
I	1	○ 「ふしぎな世界へ出かけよう」を読んで、物語を書くという学習の見通しをもつ。	・ ふしぎな世界の物語のモデルを提示し、学習の見通しをもつことができるようにする。
		○ 「注文の多い料理店」の範読を聞く。	・ 題名からどんなことが書かれた物語であるかを予想し、範読を聞く。
	2 3	○ 一人学びをする。	・ 意味調べ・登場人物・物語の構成・設定などについて、「一人学びノート」を用意し、一人学びをする。
	4 5	○ 自分のファンタジー作品のあらすじと構成を考えて書く。	・ おおまかなあらすじと「設定」「展開」「山場」「結末」のなかで「現実—ふしぎな世界—現実」という構成になっているか、確認するようにする。
II	6	○ あらすじ・構成を理解する。 ○ 「ストーリーノート」を書く。	・ 「場所」に着目して、物語の構成をおさえる。 ・ 「現実」「ふしぎな世界」「現実」に分け、ふしぎな世界への入り口と出口を理解することができるようにする。 ・ 「設定」「展開」「山場」「結末」の4つの部分にわけ。 ・ 自分はどのようなファンタジー作品を書きたいか考え「ストーリーノート」に書くようにする。（前時の続き）
	7	○ 「設定」と「結末」の部分から、「二人のしんし」を比較し、変わったところと、変わらなかったところを読み取り、物語のメッセージを考える。 ○ 「二人のしんし」の性格を読み取る。 ○ 「ストーリーノート」を書く。 比較	・ 物語の最初と最後を比較して、「二人のしんし」の性格や考えが変化したかどうかをみつけるように支援する。 ・ 変わらなかったところに注目させ、それはどうして変わらなかったのかを話し合わせる。 ・ これまでの読書経験や辞書的な意味から紳士像を挙げ、「二人のしんし」との違いを考え、「二人のしんし」の性格を読み取るようにする。 ・ 自分のファンタジー作品に生かせそうなことを「ストーリーノート」に書く。
	8	○ 「二人のしんし」の心情の変化を読み取る。 ○ 「ストーリーノート」を書く。 推理	・ 扉をもとに、「二人のしんし」の会話文や行動から心情を考えることで、「二人のしんし」の人物や考え方などを読み取ることができるようにする。 ・ 心情曲線を使って、「二人のしんし」の心情の変化を読み取ることができるようにする。 ・ 中心人物の心情の変化を読み取り、自分のファンタジー作品に生かせそうなことを「ストーリーノート」に書くようにする。 ・ 「二人のしんしは、いつ食べられると気がついたか」を考えるようにする。

	9	○ 山場を読み、「二人のしんし」の言動を読み取る。 ○ 「ストーリーノート」を書く。 <div>推理</div>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「二人のしんし」の言動を読み取ることで、「二人のしんし」の人柄や考え方などを読み取ることができるようにする。会話文から心情をとらえることで、じわじわとせまる恐怖感の書き方に気づくようにする。 ・ 山場での中心人物の言動を読み取り、自分のファンタジー作品に生かせそうなことを「ストーリーノート」に書くようにする。
	10	○ 物語のしかけ・表現の工夫を見つける。 <div>定義付け</div>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 戸が何枚もあることやその色や文字・置かれた小物の効果を考える。また、効果的な表現（オノマトペ・心情描写・情景描写）が書かれている時と書かれていない時とを比べて、その効果を考えるように助言する。
	11 本時	○ 「ストーリーノート」を書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・ ファンタジー作品に使いたいしかけや表現の工夫を「ストーリーノート」に書くようにする。
Ⅲ	12	○ 「ストーリーノート」を完成する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ おおまかなあらすじと「設定」「展開」「山場」「結末」のなかで「現実—ふしぎな世界—現実」という構成になっているか、再度確認するようにする。
	13 14	○ ペアでファンタジー作品のおおまかなあらすじと構成を確認する。 ○ 第Ⅱ次で書きためてきた「ストーリーノート」を基に、ふしぎな世界の物語を完成する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 友だちの工夫で参考にしたい事柄は、「ストーリーノート」に書きたしてよいこととする。 ・ 前時までに書きためてきた「ストーリーノート」を基にして、物語を書くことができるように支援する。
	15	○ 完成したファンタジー作品をグループで読み合い、意見交流をする。 ○ 読んでみたい作品を全体で交流する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 友だちのファンタジー作品を読むことで、表現の工夫を見つけるように助言する。 ・ グループで作品を紹介し、感想を交流させる。 ・ 読んでみたい作品をグループで一つ発表し、全体で感想を交流させる。

1 1. 本時の学習 (1 1 / 1 5)

① 本時の目標

物語のおもしろさや表現の工夫を見つけ、自分のファンタジー作品に生かすことができる。

② 本時の展開

学習活動	指導上の留意点
1. 本時の課題を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 前時までの学習を思い出し、本時の課題を確認する。 ○ 例文を使って、表現の工夫を叙述から見つけることを確認する。
表現の工夫を見つけ、自分の作品に生かそう	
2. 表現の工夫を見つけ、全体で交流する。 定義付け	<ul style="list-style-type: none"> ○ 見つけた表現の工夫（おもしろさ）をノートに書かせ、全体で交流する。
3. おもしろい表現だと思う言葉を一つ選び、なぜその表現がおもしろいと思うのか理由を考え、グループで交流する。 理由付け 比較	<ul style="list-style-type: none"> ○ 司会が中心となって進めていく。 ○ 理由が書けない児童には、その表現がある時とない時ではどう違うかを考えさせる。
4. 全体で交流する。 〈 作家の時間 〉	<ul style="list-style-type: none"> ○ 全体で交流するときに、オノマトペや繰り返しの表現や、例えて表現しているところをおさえ、作家の時間で見つけた表現の工夫を生かせるように助言する。 ○ 自分のファンタジー作品に、表現の工夫を入れて書かせる。
5. 学習したことをもとに、自分のファンタジー作品に表現の工夫を入れて、書き直す。	
6. 作った文章を発表する。	
7. 振り返りと次時の学習の予告をする。	<p>【評価】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 表現の工夫について考えることができたか。 （ノート・発表） ・ 表現の工夫を使って「設定」の文章を書くことができたか。 （「ストーリーノート」）

12. 板書計画

注文の多い料理店

宮沢 賢治

⊗表現の工夫を見つけて、自分の作品に生かそう

風がふいてくる。

風がどうとふいてくる。

・「ハチン」とじょうを
かけました。

想像しやすいから

・「すんすん進んでい
くと」

はりきつて前に進ん
でいく感じが分かる
から。

オノマトペ

・「つ、つ、つ、つまり、
ぼ、ぼ、ぼくらが……」

こわさにふるえて
しゃべれなくなつて
いる様子がよく分か
るから。

・「泣いて泣いて泣いて
泣いて泣きました。」

あまりにもこわいこ
とがよく分かるから

くり返す

・「にげ……」

紙くずのようにくし
くしゃな顔が想像
できるから。

・顔がまるでくしゃく
しゃの紙くずのように

紙くずのようにくし
くしゃな顔が想像
できるから。

比ゆ（何かに例える）

〈作家の時間〉

学んだことをもとに自分の表現の工夫を書いて
みよう。

注文の多い料理店

宮沢賢治

起 二人のわかいしんしが、すっかりイギリスの兵隊の形をして、**ぴかぴか**する鉄ぼうをかついで、白くまのような犬を二ひき連れて、だいぶ山おくの、木の葉の**かさかさ**したところを、こんなことを言いながら、歩いておりました。

「ぜんたい、ここらの山はけしからんね。鳥もけものも一ぴきもいやがらん。何でも構わないから、早くタンタアーンと、やってみたいもんだなあ。」

「しかの黄色な横つばらなんぞに、二、三発おみまいもうしたら、ずいぶん痛快だろうねえ。**くるくる**回って、それからどたつとたおれるだろうねえ。」

それはだいぶの山おくでした。案内してきた専門の鉄ぼううちも、ちよつとまづいて、どこかへ行つてしまつたくらいのおおくでした。

それに、あんまり山がものすごいので、その白くまのような犬が、二ひきいっしょにめまいを起こして、しばらくうなづいて、それからあわをはいて死んでしまいました。

「実にぼくは、二千四百円の損害だ。」

と、一人のしんしが、その犬のまぶたを、ちよつと返して見て言いました。

「ぼくは二千八百円の損害だ。」

と、もう一人が、くやしそうに、頭を曲げて言いました。

初めのしんしは、少し顔色を悪くして、じつと、もう一人のしんしの、顔つきを見ながら言いました。

「ぼくはもうもどろうと思う。」

「さあ、ぼくもちよつと寒くはなつたし、はらはすいてきたし、もどろうと思う。」

「そいじや、これで切り上げよう。なあに、もどりに、昨日の宿屋で、山鳥を十円も買つて帰ればいい。」

「うさぎも出ていたねえ。そうすれば結局おんなじこつた。では帰ろうじやないか。」

ところが、どうもこまつたことは、どっちへ行けばもどれのか、いつこつ見当がつかなくなつていました。

承 風がどうとふいてきて、草はザワザワ、木の葉はカサカサ、木はゴトンゴトンと鳴りました。

「どうもはらがすいた。さつきから横つばらがいたくてたまらないんだ。」

「ぼくもそうだ。もうあんまり歩きたくないな。」

「歩きたくないよ。ああこまつたなあ、何か食べたいなあ。」

「食べたいもんだなあ。」

【題名読み】「注文の多い料理店」という題名から、どんな物語をイメージしますか。

○形：…かつこうだけ

○ぴかぴか：…まだ使いこなしていない→
狐の初心者

○ぜんたい、ここらの山は…二人の会話文から二人の動物や狐に関する考え方について話し合う。→動物を殺すことを遊びのように思っている。

○山がものすごい…どのような山なのか？→不思議な出来事が起きてもおかしくない場所

○二千四百円：…今の金額で二百〜三百万円→それにしても、あまりにも高すぎないか。紳士の見栄なのか？

○ちよつと：…自分の飼っている犬が死んだのにちよつとしか見ないということ→生き物の命をどう思っているのか

○くやしそうに…何がくやしかつたのか？→犬の命より損害のお金がかくやしかつたのか

○少し顔色を悪くして→も一人より自分の犬の金額が低かつたから

○顔つきをみながら：…常に相手と自分を比べて、自分のほうが上（金持ち・物知り・上流）ということを誇示したい→このことがこれ以降の二人の悲劇をうむことになる。

○十円も買つて帰ればいい。…見栄や見ためだけの狐をしている。

○おんなじ：…狐で獲物を手に入れることと、動物を買つて手に入れることがおんなじ→見かけや体裁だけを気にする人間・動物の命を軽視している

【発問】ここまで読んで、この二人のしんしは、どのようなしんしだと思ふか。
・見栄っ張り ・お金に固執する ・動物の命をなんとも思っていない 等

○風がどうと…場面の様子の変化を告げるシグナル

→これから始まる不思議な世界へのプロローグ→幻想の世界

→結末部分にも同じ表現

二人のしんしは、ザワザワ鳴るすすきの中で、こんなことを言いました。

そのとき、ふと後ろを見ますと、りっぱな一軒の西洋造りのうちがありました。

そして、げんかんには、

RESTAURANT
西洋料理店
WILDCAT HOUSE
山猫軒

という札が出ていました。

「君、ちようどいい。ここはこれでなかなか開けてるんだ。入ろうじゃないか。」

「おや、こんなところにおかしいね。しかしとにかく何か食事ができるんだろう。」

「もちろんできるぞ。看板にそう書いてあるじゃないか。」

「入ろうじゃないか。ぼくはもう何か食べたくてたおれそうなんだ。」

二人はげんかんに立ちました。げんかんは白い瀬戸のれんがで組んで、実にりっぱなもんです。

そしてガラスの開き戸がたつて、そこに金文字でこう書いてありました。

①【どなたもどうかお入りください。決してこえんりよはありません。】

二人はそこで、ひどく喜んで言いました。

「こいつはどうだ。やっぱり世の中はうまくできてるねえ。今日一日なんぎしたけれど、今度はこんないいこともある。このうちは料理店だけれども、ただでこちそうするんだぜ。」

「どうもそうらしい。決してこえんりよはありませんというのはその意味だ。」

二人は戸をおして、中へ入りました。そこはすぐろうかになっていました。そのガラス戸のうら側には、金文字でこうなっていました。

②【ことに太ったおかたやわかいおかたは、大かんげいたします。】

二人は大かんげいというので、もう大喜びです。

「君、ぼくらは大かんげいに当たっているのだ。」

「ぼくらは両方かねてるから。」

ずんずんろうかを進んでいきますと、今度は水色のペンキぬりの戸がありました。

「どうも変なうちだ。どうしてこんなにたくさんの戸があるのだろう。」

「これはロシア式だ。寒いところや山の中はみんなこうぞ。」

○ザワザワ鳴るすすき…「風がどうとふいてきて、草はザワザワ、…」の表現から幻想的な世界へ、ザワザワ鳴るすすきは、さらに不思議な世界への誘い。

○ふと後ろを見ますと…それまで、何もなかったはずなのに、突然「りっぱな一軒の西洋造りのうち」が…先ほどのザワザワの音が、幻想をかもし出している。

○なかなか開けているんだ。…断定的な言い方↓この後、いろいろな場面で知ったかぶりをする

○おや、おかしいね。↓何かおかしいことに気付くが、自分たちにいいように解釈をしていく。

○白い…後にいろいろな色が出てくる↓色が表す意味を考えていく。

○りっぱ↓見栄や見かけを気にする紳士が、きつと誘われて入ってくるだろうという山猫たちの考え？

○金文字…一番はじめに出会う文字が金色↓見栄や見かけを気にする紳士に対するワナ

①裏の意味…えんりよはありません…「遠慮が要らない」ではなく「こちら側は遠慮をしないぞ！」

○ただで…三百万円の犬を買うほどの金持ちなのに「ただ」でこちそうにありつけると思う紳士↓自分勝手な解釈（自分にとって都合よく解釈）する自分本位の人間

②裏の意味…「太っていて若い人間の肉は、おいしくて食べ応えがある！」

○どうも変なうちだ…

この二人の会話から↓はじめのうち（④のとびらまで）は、常に一人が疑問をもつが、もう一人が知ったかぶりや自己本位の解釈を述べ、それによって、お互いが納得してしまふ。

○みんなこうさ↓自分本位の解釈をしている。知ったかぶり。

○水色 ↓山猫の目玉 寒い感じ

そして二人はその戸を開けようとし、上に黄色な字でこう書いてありました。

③【当軒は注文の多い料理店ですから、どうかそこはご承知ください。】

「なかなかはやってるんだ。こんな山の中で。」

「それあそうだ。見たまえ、東京の大きな料理屋だつて大通りには少ないだろう。」

二人は言いながら、その戸を開けました。すると、そのうら側に、

④【注文はずいぶん多いでしょうが、どうかいちいちこらえてください。】

「これはぜんたいどういうんだ。」

一人のしんしは顔をしかめました。

「うん、これはきつと注文があまり多くて、したくが手間取るけれどもごめんくださいと、こういうことだ。」

「そうだろう。早くどこか部屋の中に入りたいもんだな。」

「そしてテーブルにすわりたいもんだな。」

ところで、どうもうるさいことは、また戸が一つありました。そしてそのわきに鏡がかかって、その下には長いえの付いたブラシが置いてあったのです。

戸には赤い字で、

⑤【お客様がた、ここにかみをきちんとして、それからほき物のどろを落としてください。】

と書いてありました。

「これはどうももつともだ。ぼくもさつきげんかんで、山の中だと思つて見くびつたんだよ。」

「作法のきびしいうちだ。きつと、よほどえらい人たちが、たびたび来るんだ。」

そこで二人は、きれいにかみをけずつて、くつのどろを落とした。

そしたら、どうです。ブラシを板の上に置くやいなや、そいつがぼうつとがすんでなくなつて、風がどうつと部屋の中に入ってきました。

二人はびつくりして、たがいに寄りそつて、戸がガタンと開けて、次の部屋へ入つていきました。早く何か温かいものでも食べて、元氣をつけておかないと、もうとほうもないことになつてしまつと、二人とも思つたのです。

戸の内側に、また変なことが書いてありました。

⑥【鉄ぼうとたまをここに置いてください。】

見ると、すぐ横に黒い台がありました。

「なるほど、鉄ぼうを持つてものを食うという法はない。」

「いや、よほどえらい人がしじゅう来ているんだ。」

二人は鉄ぼうを外し、帯皮を解いて、それを台の上に置

○黄色 →…危険を表す

③裏の意味…「これから、お前たちにいっぱい注文をだすぞ。覚悟しておけ！」

○それあそうだ → なんの根拠もない考え

④裏の意味…「そのたくさんの注文に、つべこべ言わずにいちいち従え！」

○これはぜんたいどういうんだ → この時点では、どちらか一人のしんしは不思議がる。

○うん、これはきつと → しかし、もう一人が自分たちに都合よく解釈する。

○こういうことだ → 知つたかぶりを強調する断定的な言い方

○うるさい → このうるさいは、騒音でやかましいという意味ではなく、注文が多くてわずらわしく感じる時に使う。

○赤い…黄から赤へ → 危険度が増した？

⑤裏の意味…「おいしく食べるために、かみを整えて、くつのどろもとつておけ！」

○えらい人たちが…犬も倒れるぐらい「ものすごい」山の中の料理店なのに、そんなえらい人がたびたび来るのか？しかし、しんしはそんなおかしいことにも気づかない。

⑤のとびらから、それまでどちらがおがしく思い、疑問を述べていたが、これ以降、二人とも「そのとおりだ」と納得して進んでいく。

○風がどうつと…さらに不思議な現象が起るシグナル

○もうとほうもない → 不思議な現象を見たのは、空腹のせいだと勝手に解釈する二人

⑥裏の意味…「鉄砲とたまをもつていたらこつちが危なくてしょうがない！置いておけ！」

○なぜ、店主は一度も顔を出していないのに、二人が鉄ぼうやたまを持っているのを知っているのか → どこかで見ている？はじめから二人をねらっている？

○黒い…金、黄色、赤、黒へ

【発問】作者はどうしてこのように色を変化させたのでしょうか。

○しじゅう…たびたびからしじゅうに、こんな山の奥にしじゅうよほどえらい人が来ると断定する → 上流社会へのあこがれ

きました。

また黒い戸がありました。

⑦【どうかぼうしと外とうとくつをおとりください。】

「どうだ、とるか。」

「しかたない、とろう。確かによほどえらい人なんだ。」

おくに來ているのは。」

二人はぼうしとオーバーコートをくぎにかけ、くつをぬいでペタペタ歩いて戸の中に入りました。

戸のうら側には、

⑧【ネクタイピン、カフスボタン、眼鏡、さいふ、その他金物類、ことにとがったものは、みんなここに置いてください。】

と書いてありました。戸のすぐ横には、黒ぬりのりっぱな金庫も、ちゃんと口を開けて置いてありました。かぎまでそえてあったのです。

「ははあ、何かの料理に電気を使うとみえるね。金気のものはない。ことにとがったものはないと、こういふんだろう。」

「そうだろう。してみると、かんじようは帰りにここではらうのだろうか。」

「どうもそうらしい。」

「そうだ。きつと。」

二人は眼鏡を外したり、カフスボタンをとったり、みんな金庫の中に入れて、パチンとじょうをかけました。

少し行きますとまた戸があつて、その前にガラスのつぼが一つありました。戸にはこう書いてありました。

⑨【つぼの中のクリームを顔や手足にすつかりぬってください。】

見ると確かにつぼの中のものは牛乳のクリームでした。

「クリームをぬれというのはどういうんだ。」

「これはね、外が非常に寒いだろう。部屋の中があんまりあたたかいとひびが切れるから、その予防なんだ。どうもおくには、よほどえらい人が來ている。こんなところで、案外ばくらは、貴族と近づきになれるかもしれないよ。」

二人はつぼのクリームを顔にぬって手にぬって、それからくつ下をぬいで足にぬりました。それでもまだ残っていましたから、それは二人ともめいめいこつそり顔へぬるふりをしながら食べました。

それから大急ぎ戸を開けますと、そのうら側には、

⑩【クリームをよくぬりましたが、耳にもよくぬりましたか。】

と書いてあつて、小さなクリームのつぼがここにも置いてありました。

「そうそう、ぼくは耳にはぬらなかった。あぶなく耳にひ

⑦裏の意味…「ぼうしと外とうとくつは食べないからな！邪魔になる。置いておけ！」

○確かに…たびたび→しじゅう→確かに…勝手に、自分たちに都合よく解釈していく二人。確かにと言つて断定している。

○來ているのは…姿も見えないのに「來ている」と決めつけている→自分たちに都合のいい解釈

⑧裏の意味…「金物類やとがったものなんか口に入ったら口の中がきれるから、ちゃんとここに置いておけ！」

○かみをきちんと整えさせるさせるような店が、なぜ、ネクタイピンやカフスボタンを取らせるのか？→それともカフスボタン等は文明や都会の象徴？

○「ははあ、…」・「そうだろう…」・

「そうらしい」・「そうだ。きつと」→このあたりから二人の会話は、二人とも全く疑問を唱えないようになる→二人とも、自分たちにとって都合のいいようにしか考えなくなっていく。

⑨裏の意味…「おいしく味付けするためにクリームをしつかりぬつておけ！」

○これはね…なんだ。→クリームをつけることとえらい人がきていることと何の関係があるのか？自分たちのいいように言い聞かせている。

○貴族と近づきになれる…見栄や名声を気にするしんし。

○食べました…なぜ、塗るべきクリームを食べたのだろう→よほどお腹がへつていたからか。→でも本当の貴族ならそんなことはしない。

【発問】ここまで読んで、この二人のしんしは、どのような人だと思いますか？

→・自分勝手 ・知ったかぶり ・お金にきたない ・けち ・えらい人が好き ・見栄つ張り 等

⑩裏の意味…「もちろん耳のうしろにもしつかりとぬつておけ！しつかりな！」

○小さなクリームのつぼ…さつきはガラスのつぼ、今度は小さなつぼ→耳だけにクリームをぬるため→店主には、そこまで二人のしんしが見えている

びを切らすとこだった。ここの主人は実に用意しゅうと
うだね。」

「ああ、細かいとこまでよく気がつくよ。ところで、ぼく
は早く何か食べたいんだが、どうも、こう、どこまでも
ろうかじやしかたないね。」

すると、すぐその前に次の戸がありました。

⑩【料理はもうすぐできます。十五分とお待たせはいたし
ません。すぐ食べられます。早くあなたの頭にびんの
中のこう水をよくふりかけてください。】

そして戸の前には、金ひかのこう水のびんが置いてあり
ました。

二人はそのこう水を、頭へバチヤバチヤふりかけました。
ところが、そのこう水は、どうもすのようなにおいがす
るのです。

「このこう水は変にすくさい。どうしたんだろう。」

「まちがえたんだ。下女がかぜでもひいてまちがえて入れ
たんだ。」

転二人は戸を開けて中に入りました。

戸のうら側には、大きな字でこう書いてありました。

⑪【いろいろ注文が多くてうるさかつたでしょう。お気の
毒でした。もうこれだけです。どうか、体中に、つぼ
の中の塩をたくさんよくもみこんでください。】

なるほどりっぱな青い瀬戸の塩つぼは置いてありました
が、今度という今度は、二人ともぎよつとして、おたがい
にクリームをぬった顔を見合わせました。

「どうもおかしいぞ。」

「ぼくもおかしいと思う。」

「たくさんの注文というのは、向こうがこつちく注文して
いるんだよ。」

「だからさ、西洋料理店というのは、ぼくの考えるところ
では、西洋料理を、来た人に食べさせるのではなくて、
来た人を西洋料理にして、食べてやるうちと、こういう
ことなんだ。これは、その、つ、つ、つ、つまり、ぼ、
ぼ、ぼくらが……。」

がたがたがたがたふるえだして、もうものが言えませ
ん

「その、ぼ、ぼくらが……うわあ。」

がたがたがたがたふるえだして、もうものが言えませ
ん

「にげ……」

がたがたしながら、一人のしんしは後ろの戸をおそうと
しましたが、どうです、戸は一分も動きませんでした。

おぐの方にはまだ一枚戸があつて、大きなかぎあなが

○用意しゅうとう・細かいとこまで…自分
たちが完璧に料理されてしまうことをい
いように解釈している。

○どこまでも…どうしてこんなにも長く、
これほどたくさんの戸の言葉があるのだ
ろうか？→しんしたちがなかなか食べ物
にありつけないように焦らせている。苦
しさを与えている。じよじよに恐ろし
さを感じさせている。そして同時に、おい
しく味付けをしている

⑩裏の意味…「ついにお前たちを素材にし
た料理ができるぞ！十五分も待たないぞ。
すぐに俺に食べられてしまふぞ。早く最後
の調味料を頭につける！」

○食べられます…「られる」は「可能」の
意味ではなく、「受け身」の意味

○ふりかける…香水ならふりかけるのでは
なく、「つける」と書くはず

○まちがえたんだ…ここにいたつても、ま
だ都合のいい方に解釈

○大きな字で…これまでより大きな字と
いうことはどんなことを意味するのか→
戸の言葉にも「お気の毒でした」とある
ことと併せて、しんしたちに真相を告げ
た形となっている

⑪裏の意味…「いろいろこちらからの注文
がいろいろ多くてうるさかつただろう。お
気の毒に…。でももうこれで終わりだ。最
後に体じゅうに塩をたくさんよくもみこんで
おけ！」

○今度という…さすがに都合のいい解釈を
つけるしんしも、この戸の言葉はどう考
えてもおかしいと思った。

○ぼくの考えるところでは…この期に及ん
でも、知つたかぎりふうな言葉を言う。

○ぼくらが……→ぼくらが食べられる

○もうものが言えませんか…あれだけ饅舌だ
つた二人がものが言えないということ
は、よつほど恐ろしいということ。

○がたがたがたがた…がたがたを繰り返
しているのは→それだけ、すごい恐怖にか
られている。

二つ付き、**銀色**のホークとナイフの形が切り出してあって、

⑬【いや、わざわざご苦労です。たいへんけつこうにできました。さあさあ、おなかにお入りください。】

と書いてありました。おまけに、かきあなからは、きよるきよる二つの**青い目玉**がこつちをのぞいています。

「うわあ。」がたがたがたがた。

「うわあ。」がたがたがたがた。

二人は泣きだしました。

すると、戸の中では、こそこそ**こんなこと**を言っています。

「だめだよ。もう気がついたよ。塩をもみこまないようだよ。」

「あたりまえさ。親分の書きようがまずいんだ。あすこへ、いろいろ注文が多くてうるさかったでしょう、お気の毒でしたなんて、まぬけなことを書いたもんだ。」

「どつちでもいいよ。どうせぼくらには、ほねも分けてくれやしないんだ。」

「それはそうだ。けれども、もしここへあいつらが入ってこなかったら、それはぼくらの責任だぜ。」

「よぼうか、よぼう。おい、**お客さんがた**、早くいらつしやい。いらつしやい。いらつしやい。お皿もあらつてありますし、菜っ葉ももうよく塩でもんでおきました。あとは、あなたがたど、菜っ葉をうまく取り合わせて、**真つ白**なお皿にのせるだけです。早くいらつしやい。」

「へい、いらつしやい、いらつしやい。それともサラダはおきらいですか。そんならこれから火をおこしてフライにしてあげましょうか。」とにかく早くいらつしやい。」

二人はあんまり心をいためたために、**顔がまるでくしやくしやくの紙くず**のようになり、おたがい**にその顔を見合わせ**、**ふるふるふるえ** 声もなく泣きました。

中では、フツフツと笑つて、またさげんでいます。

「いらつしやい、いらつしやい。そんなに泣いては、せつかくのクリームが流れるじゃありませんか。へい、ただいま。じき持つてまいります。さあ、早くいらつしやい。」

「早くいらつしやい。親方がもうナフキンをかけて、ナイフを持って、舌なめずりして、お客様がたを待つていられます。」

二人は、泣いて泣いて泣いて泣いて泣きました。

そのとき、後ろからいきなり、

「ワン、ワン、グロア。」

という声がして、あの白くまのような犬が二ひき、戸をつ

○**銀色**…始めの色が金色

⑬裏の意味…「大変うまく調理できました。俺のお腹に入ってくれ（食われてくれ）！」

○おなかに→「中」くではなく「お腹」という意味

○**青い目玉**…一番初めに出てくる色→青色→ガラスとセットで山猫の目玉だった。

○**がたがたがたがた**→何回も繰り返しているのは、これまでの戸の言葉に対する二人の自分勝手な解釈の分だけ怯えている。

○もう気がついたよ…ということは、気づかれないように、戸の言葉を巧みに使いながら二人をおびき寄せようとしていたことになる

○ほねもわけてくれない→肉だけでなく骨まで（体全部）も食べる

○**あいつら・お客さんがた**…仲間内では「あいつら」で、しんしたちに対しては「お客さんがた」→言葉を使い分けて、だましておびき寄せようとしている

○**くおきました**。あとは→二人が戸の言葉を読んでいる間に、山猫たちは並行して料理を進めていた。

○**顔がまるでくしやくしやくの紙くず**…紙くずのような顔とは→紙くずは必要な物ではなく、中身も重さもほとんどない→二人の人間像||自分本位、見栄を張る、知ったかぶり、動物の命を何とも思わない、かつこうだけのしんし→くず（紙くずのよう）

○**フツフツと笑つて**…声もなく泣く紳士との対比→命を奪う側と奪われる側との立場が逆転した状態

○**泣いて泣いて**…五回も「泣く」を繰り返す→ナイフ・舌なめずりという言葉に反応

き破って部屋の中にとびこんできました。かぎあなの目玉はたちまちなくなり、犬どもはウーとうなつてしばらく部屋の中をくるくる回っていました。また一声、

「ワン。」

と高くほえて、いきなり次の戸にとびつきました。戸はガタリと開き、犬どもはすいこまれるようにとんでいきました。

その戸の向こうの真つ暗やみの中で、

「ニヤアオ、クワア、ゴロゴロ。」

という声が出て、それからガサガサ鳴りました。

結部屋はけむりのように消え、二人は寒さにふるふるふるえて、草の中に立っていました。

見ると、上着やくつやさいふやネクタイピンは、あつちの枝にぶら下がったり、こつちの根元に散らばったりしています。風がどうとふいてきて、草はザワザワ、木の葉は

カサカサ、木はゴトンゴトンと鳴りました。

犬がフーとうなつてもどつてきました。

そして後ろからは、

「だんなあ、だんなあ。」

とさげぶ者があります。

二人はにわかに元気がついて、

「おうい、おうい、ここだぞ、早く来い。」

とさげびました

みのぼうしをかぶった専門のりよう師が草をザワザワ分けてやつてきました。

そこで二人はやつと安心しました。

そしてりよう師の持つてきただんごを食べ、とちゅうで十円だけ山鳥を買つて東京に帰りました。

しかし、さつきいっぺん紙くずのようになった二人の顔だけは、東京に帰つても、お湯に入つても、もう元のとおりになおりませんでした。

○あの白くまのような犬が二匹…なぜ、死んだはずの犬が生き返り、しんし達を助けることになったのか→主人を助ける飼犬→動物の方がこの人間たちよりも心(義理)がある

○次の戸…最後の言葉が書かれた戸の次の戸…親分(山猫)は、もう一つおくの戸の向こうの真つ暗やみの部屋にいた。

○ガサガサ鳴り…幻想から現実へもどるシグナル→部屋はけむりのように消え

○部屋はけむりのように消え…なぜ消えたのだろう→現れたときの様子と比較

○枝…コートをかけたくぎ

○根元…さいふを入れた金庫

○風がどうと…場面の様子の変化を告げるシグナル→これで幻想は終わる(不思議な世界のエピローグ)→現実世界へ戻る。

○犬がフーとうなつて…二匹の犬は死んでいなくなった。自分たちを道具のように思っていた主人を必死に山猫から救った。

○ここだぞ。早く来い…山猫たちに迫られたときの言い方と比較→助かったと分かった瞬間もとの性格に戻る。

やはり命令口調

○十円だけ山鳥を買つて…あんなにこわいめにあつたのになぜ買つて帰つたのか→前と何も変わっていない二人

【発問】なぜ、紙くずのようになった二人の顔は、もう元のようになおらなかったのですか。

▼教材文構造表（「推理」「定義付け」「比較」の視点から）

構成	場面	しんしの会話と行動	しんしの人柄	心情の変化
設定（現実）	1	<ul style="list-style-type: none"> ・ すっかりイギリスの兵隊の形をして、びかびかする鉄ぼうをかついで、白くまのような犬を二ひき連れて… ・ 「…何でも構わないから、早くタンタアーンと、やってみたいもんだな。」 ・ 「しかの黄色な横っぱらなんぞに、二、三発おみまいもうしたら、ずいぶん痛快だろうねえ。…」 ・ 「実にぼくは、二千四百円の損害だ。」 ・ 「ぼくは二千八百円の損害だ。」 ・ 「…なあに、もどりに、昨日の宿屋で、山鳥を十円も買って帰ればいい。」 ・ 「うさぎも出ていたねえ。そうすれば結局おんなじこった。」 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 格好だけ整えて、実は、猟の初心者 ・ 動物を殺すことを遊びのように思っている。 ・ 二千四百円は、二百～三百万円。見栄からか高めに言っている。 ・ 損害（お金）のことしか考えていない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 命をなんとも思っていない。
展開（非現実）	2・3	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「君、ちょうどいい。ここはこれでなかなか開けてるんだ。」 ・ 「おや、こんなところにおかしいね。」 ・ 「このうちは料理店だけれども、ただでごちそうするんだぜ。」 ・ 「決してごえんりよはありませんというのはその意味だ。」 ・ 「きつと、よほどえらい人たちが、たびたび来るんだ。」 ・ 「いや、よほどえらい人がしじゅう来ているんだ。」 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 断定的に言っているだけ。 ・ 疑問を抱くが強くは言えない。 ・ お金持ちなのに、ただでごちそうにありつけると思っている。 ・ 自分にとって都合のよい解釈をする。 ・ 偉い人と近づきになりたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ おいしい料理を食べることができる。
山場（非現実）	4・5	<p>・（「いろいろ注文が多くてうるさかったでしょう。…」の戸を見て）今度という今度は、二人ともぎょっとして、おたがいにクリームをぬった顔を見合わせました。</p> <p>・「だからさ、西洋料理店というのは、…これは、その、つ、つ、つ、つまり、ぼ、ぼ、ぼくらが……。」</p> <p>・ががたがたがたがたふるえだして、もうものが言えませんでした。・</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ この戸は変だと思う。 ・ この期に及んで、知ったかぶりを言う。 ・ 恐怖のあまり、何も言えなくなった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分たちが食べられることに気付く。
結末（現実）	6	<ul style="list-style-type: none"> ・ 二人はにわかに元気がついて、「おうい、おうい、ここだぞ、早く来い。」とさげびました。 ・ そしてりょう師の持ってきただんごを食べ、とちゅうで十円だけ山鳥を買って東京に帰りました。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 助かったとわかった瞬間もとの性格にもどる。 ・ 前と考え方が何も変わっていない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 横柄な態度。 ・ 動物の命を軽視。

6年 国語科学習指導案

指導者 大阪市立豊崎本庄小学校

1. 日時 平成26年11月14日(金) 6時間目(14:45～15:30)
2. 学年・組 第6学年2組 在籍 32名
3. 単元名 「登場人物の変化をとらえ、人物関係図をもとに感想文に表そう」
(「海のいのち」立松 和平 「人物の生き方を考えながら読もう」東京書籍 6年下)
4. 付けたい言語の力とそれにふさわしい言語活動

本単元で付けたい言語の力を、「C読むこと」の指導事項エ「登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめること」、指導事項オ「本や文章を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすること」とする。この力をつけるために「人物関係図をまとめ、それを生かして感想文を作成する」言語活動を設定する。教材「海のいのち」は、中心人物・太一の成長物語である。太一は場面の進展にしたがって変化し、成長していくが、それは周りの人物の影響なくしてはあり得ない。その人物の相互関係から、内面にある深い心情をとらえるにふさわしい教材であるといえる。人物関係図をまとめる活動を通して、せりふや行動の意味を読んで、心情の変化に迫るとともに、とらえた心情について自分なりの考えをもち、それを感想文として書き、交流することで、自分のものの見方を広げ、深めることができると考えた。

5. 単元間の関連と系統

前単元(6年・6月)

物語が強く語りかけてきたことを考えながら読もう
「ばらの谷」
○ 物語が自分に最も強く語りかけてきたことを自分の言葉でまとめる。

本単元(6年・11月)

登場人物の変化をとらえ、そこから生まれた考えを感想文に表そう
「海のいのち」
○ 人物の相互関係から太一の成長を読み、そこから生まれた考えを感想文に表す。

次単元(中1・5月)

場面の様子や登場人物の思いに注意して、作品を読み味わおう
「遠い山脈」
○ 少年の思いを想像し、老人に伝えたいことをまとめる。

6. 学習目標

- 人物相互の関係をまとめ、中心人物の成長をとらえることを通して、自分の考えをもつ。
- ・ 登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめることができる。
- ・ 自分の考えをもとにまとめた感想文を交流することにより、自分のものの見方を広げ、深めることができる。

7. 評価規準

国語の関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
<ul style="list-style-type: none"> 文章を読んで考えたことを発表しあい、自分の考えを広げたり、深めたりしている。(Cオ) 	<ul style="list-style-type: none"> 登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめている。(Cエ) 	<ul style="list-style-type: none"> 語感、言葉の使い方に対する感覚などについて関心を持っている。(イ(カ)) 比喩や反復などの表現の工夫に気付いている。(イ(ケ))

8. 指導にあたって

【児童観】

本学級の児童は、これまでに物語文において、登場人物の行動や言葉、情景描写などに着目し、登場人物の心情の変化をとらえる学習をしている。4月教材「風切るつばさ」では、読み取ったことをもとに一人一人が最も強く心に残った場面を選び、読み方を工夫して「語り」を行う活動に取り組んだ。6月教材「ばらの谷」では、物語を「設定」「展開」「山場」「結末」の4つの部分に分け、内容を整理しながら構成をとらえた。そして、物語の構成や叙述を手がかりにし、中心人物であるドラガンの心情の変化を読み取っていった。読み取りの際、文章から抜き出して答えるような発問には積極的に発表しようとするが、自分の考えを自分の言葉でまとめて答える発問には、自信を持って発表することのできる児童は少ない。このことは、「書くこと」にも関連していて、自分の考えを自分の言葉で書くときには、何をどのように書いたらよいか分からず、手が止まってしまう児童がいる。そこで、そのような児童には友達の考えを聞いて、自分の考えに似ていると思ったら友だちの考えを取り入れてもいいように助言している。

「話すこと・聞くこと」では、友だちの意見と自分の意見を比べながら聞くように指導している。同じ意見であれば友だちの意見に付け加えて自分の考えを述べたり、違う意見であればどう違うのかということをもとに述べたりして、話し合い活動を進めてきた。

【単元観】

本教材「海のいのち」は海に生きる少年・太一の成長物語である。村一番のもぐり漁師である太一の父は「瀬の主」と呼ばれる巨大なクエに挑み、命を落とす。太一にとって父は憧れであり、目標であった。父を失った太一は、父と同じ瀬を漁場とする与吉じいさに弟子入りする。与吉じいさから漁師の技を学ぶ太一は同時に「千匹に一匹でいい」という教えを受ける。与吉じいさの死後、いよいよ「瀬の主」と対決するため、太一は瀬にもぐる。「瀬の主」と向き合った太一は、もりをうたなかった。父の仇をうつため、与吉じいさに弟子入りし、瀬にもぐったはずの太一であるが、なぜクエを殺さなかったのか。この物語最大の疑問がこの部分であり、課題として児童に意見交流を図り、読みを深めたいところである。

「海のいのち」は題名はもとより、描写、登場人物の会話文、すべてに示唆的、象徴的な表現がちりばめられている。「海のめぐみだからなあ」という父の言葉。「千匹に一匹でいいんだ」という与吉じいさの言葉。そして本文にも出てくる「海のいのち」。これらは、互いに結びつきながら太一の成長に大きく関わっていく。また、会話文だけでなく、不漁の日も変わらなかった父、なかなか釣糸を太一に握らせない与吉じいさ等、行動の描写も、彼らが海に対し持つ思いを読む手掛かりとなる。それらがクライマックスでクエにもりをうたない太一の姿と結びついたとき、児童はより深い読みと出会うことができるだろう。そのような登場人物の相互関係をとらえるため、今回は人物関係図を用いた実践を行う。人物関係図とは、人物同士、人物と出来事の関係を図示したものである。ある人物が他の人物や出来事からどのような影響を受け、どのような変化を遂げたかが一目で分かるように書き表すことが必要となる。さらに、それを活用することで、太一の変化や成長について、児童が自分なりの意見を持てるようにしたい。

【指導観】

第一次では、範読を聞いた後、初発の感想を書き、学習計画を立てる。児童が教材文を読んで感じた「疑問に思ったこと」や「もっと知りたいと思ったこと」をもとに、学習を進めることができるようにする。そして、一人学びに取り組むようにする。それぞれが意味調べや、物語のあらすじ、登場人物をワークシートに書き込むようにする。一人学びを終えたら、全体でわかったことを交流し、整理していく。このとき、山場での太一の心情の変化についての描写を押さえておく。その後、主要な登場人物がどう関わりあっているかを記した人物関係図を書くようにする。これからの学習ではこの人物関係図を見直したり、わかったことを書き加えたりしながら読みを深め、それをもとに感想文を書くことを伝える。その際、自分の生活や体験

も振り返り、太一と同じように自分も他者から影響を受けて成長したことを思い出しながら書くように助言する。

第二次では、「設定」「展開」「山場」「結末」のそれぞれの場面から、太一と主要な人物の関係を読む。この際、登場人物が太一にどのような影響を与えたか、父、与吉じいさ、母三者の言動や、太一がクエと対峙したときの言動を、本文からピックアップする作業を行う。太一の成長に大きく関わると思われるせりふや描写に線を引いてノートに書き写し、その理由を考える。そうすることによって、表現をより深く吟味し、その言動について太一はどのように感じ、受け止めたのかを推理しながら書けるようにしたい。書いた後は理由をペアで交流し、参考になるものがあれば自分の意見として生かすようにする。そして、これらをもとに、第一次で書いた人物関係図を見直し、まとめるようにする。読み取ったことを図に表すことで、新たな発見や、これまでとの関連が見つかることも期待できる。また、人物関係図を書いた後に周りの人と交流することで、相手の考えの良いところを見つけ、全体に広げるようにしたい。

第三次では、第二次で完成させた人物関係図をもとに感想文を書く。三部の構成や書き出しの工夫など、これまでの学習を思い起こさせるような掲示やヒントカードで支援したい。人物関係図に拾い上げた印象的な描写等も積極的に表現に生かせるよう助言したい。また、その描写などから読んだ太一の心情の変化と、他者との関わりから成長した自分を比べ、思いや考えを書けるようにしたい。

「人物関係図」を作成することで付けたい言語の力として、以下のようなものがある。

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">1. 描写やせりふから、はっきりと書かれていない思いを推理する力。2. 人物のその後の変化が、他の人物のどのような言動から引き起こされたのか関係づける力。3. 人物の相互関係を、記号や矢印も使って視覚的にわかりやすく表す力。 |
|--|

9. 「交流の場」における支援のあり方

本単元での交流の場は、大きく考えて次の三つになる。

□太一に影響を与えたと思われる部分に線を引き、考えを書いたうえでペアで交流する場。

□第二次の時間ごとに書く人物関係図を全体で交流する場。

□感想文を交流する場。

全体の場で意見を発表しにくい児童も多くいることを考え、意見を固める場としてペアトークを多く取り入れたい。固まりきらない考えも口に出して説明していく過程で形になっていくことがある。ペアトークの際はつたない表現であっても相手はせかしたり、自分の意見を挟んだりすることなく拝聴する姿勢が重要である。感想文交流の場では読み合わせの会を行い、互いに推薦しあう場も設けたい。相手の良さを見つけ、それを取り入れる姿勢を持つため、「生かしたい表現」をメモに取る活動もあわせて行いたい。

10. 学習指導計画（全12時間）

次	時	学習活動	支援のあり方（発問・助言・補説 等）
I	1	○ 範読を聞いて、初発の感想を書いた後、感想文を書くという学習の見通しをもって学習の計画を立てる。	・ 人との関わりから自分が成長したことについての感想文を書くという目的をもって、本文を読み進めることを意識できるようにする。
	2		・ 初発の感想の意見をもとに、学習の計画を立てるようにする。
	3	○ 一人学びをする。	・ 全体で交流しながら事柄を整理していく。（登場人物・場面・あらすじ・構成・表現）
	4	○ 人物関係図を書き、交流する。	・ 登場人物や場面を確認しながら書くようにする。
II	5	○ 「設定」を読んで、父と太一の関係を考え、関係図を見直す。	・ 父の海に対する思いや生き方が、太一の考え方に影響を与えたことをとらえ、人物関係図を見直したり書き加えたりするようにする。
	6	○ 「展開①」を読んで、与吉じいさと太一を考え、関係図を見直す。	・ 与吉じいさの海に対する思いや生き方が、太一の考え方に影響を与えたことをとらえ、人物関係図を見直したり書き加えたりするようにする。
	7		
	8	○ 「展開②」を読んで、母と太一の関係を考え、関係図を見直す。	・ 母が太一の考え方に影響を与えたことをとらえ、人物関係図を見直したり書き加えたりするようにする。
	9 本 時	○ 「山場」を読んで、太一の言動やクエの様子、父や与吉じいさの言動の関わりを考え、関係図を見直す。	・ クエにもりをうたなかった太一の考えについて、これまでの学習と関連づけて意見がもてるようにする。 ・ クエと太一の関わりからわかったことを人物関係図にまとめられるようにする。
III	10	○ 「結末」を読んで、太一の生き方を関係図に書き加える。	・ 前時の学習をふまえ、太一のその後のありようについて意見がもてるようにする。
	11	○ 感想文を書く。	・ 太一の成長について自分の考えを述べるとともに、自分が他者に影響を受けたことで、変わった考え方やできるようになったことを書くようにする。 ・ 人物関係図のどの部分を使うのかということや、文章構成について助言する。
	12	○ 書いた感想文を交流する。	・ 書いた感想文を読み合い、良いものについて互いに推薦し、メモを取るようにする。

1 1. 本時の学習（9／12）

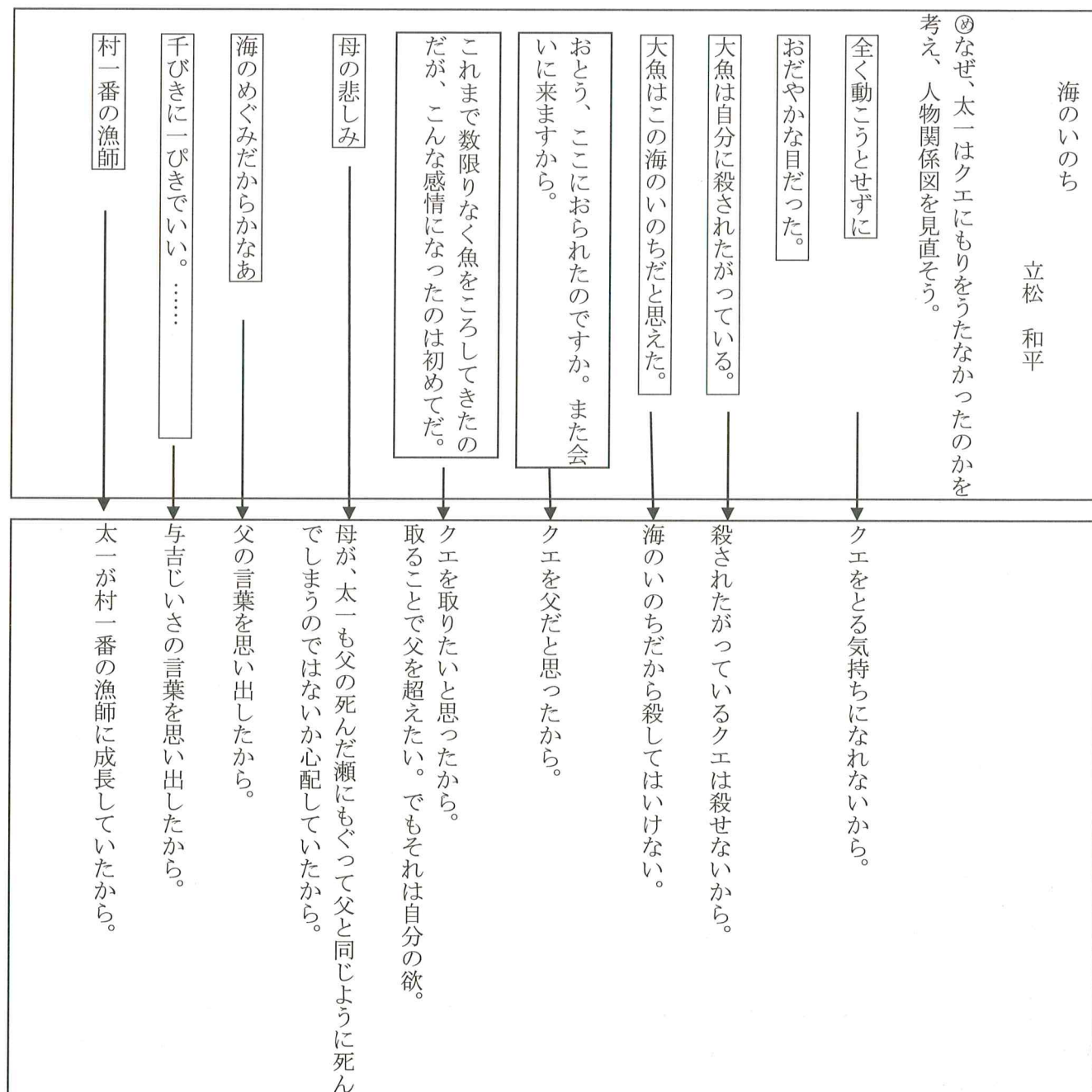
① 本時の目標

太一が「瀬の主」と出会う場面を読んで、もりを打たなかった太一の行動について自分の考えをまとめ、人物関係図を見直すことができる。

② 本時の展開

学習活動	指導上の留意点
1. 本時の課題を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 前時までの学習を振り返り、本時の課題を確認できるようにする。 ○ 太一の考えが変わったところをおさえる。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> なぜ、太一はクエにもりを打たなかったのかを考え、人物関係図を見直そう。 </div>	
2. 学習場面を音読する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 太一の行動とクエの様子を考えながら音読をする。
3. 太一がクエにもりを打たなかった理由を書く。	<ul style="list-style-type: none"> ○ これまでの学習を振り返り、人物関係図を用いてもよいことを伝える。 ○ 太一の考えがわかる言葉や文に線を引き、ノートに書くようにする。 ○ 父や与吉じいさの海に対する考え方に着目できるようにする。
4. 理由をペアで交流する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 根拠をもとに述べられるようにする。 ○ 友だちの考えでよいと思ったことはノートに書き加え、自分の考えに生かせるようにする。
5. 理由を全体で交流する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ ペアで交流したことを全体に広げ、交流できるようにする。
6. 人物関係図を見直す。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 必要に応じて、交流してわかったことや自分の考えを人物関係図に書き加えることができるようにする。
7. 見直した人物関係図を発表する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 太一のクエに対する思いや、心の成長に着目できるようにする。
8. 本時の学習を振り返り、次時の学習の予告をする。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学習したことをまとめ、振り返りを書く。

12. 板書計画



○ 教材文構造表

登場人物の言動	発 問	「推理」・「定義づけ」
二メートルもある大物をしとめても、父は <u>自まんすることなく</u> 言うのだった。 「海のめぐみだからなあ。」（父）	○ どうして、父は自まんしなかったのだろうか。	推理 父が魚をとる目的は、大物をとることではなく、「海からのめぐみ」として、生きていくのに必要な分だけをとることであるのだと思う。
「 <u>千びきに一びき</u> 」でいいんだ。千びきいるうち一びきをつれば、ずっとこの海で生きていけるよ。」 （与吉じいさ）	○ 「千びきに一びき」とは、どういう意味なんだろう。	定義 たくさんいるからと欲張ってとるのではなく、生きていくのに必要な分だけをとること。そうすれば、いつまでも、魚の数は減らず、ずっと漁ができる。
「自分では気づかないだろうが、おまえは <u>村一番の漁師</u> だよ。太一、ここはおまえの海だ。」 （与吉じいさ）	○ 「村一番の漁師」とは、どういう意味なんだろう。	定義 無駄に魚をとらずに、これからの魚のこと、海のことを考えて、生きていくのに必要な分だけとる漁師。
太一は、そのたくましい背中に、 <u>母の悲しみさえも背負おう</u> としていたのである。（太一）	○ 「母の悲しみを背負う」とは、どういう意味なんだろう。	定義 父と同じように、太一も海で死んでしまうのではないかと怖れている母の気持ちを知りながら、海にもぐることに。
耳には何も聞こえなかったが、太一は <u>そう大な音楽</u> を聞いているような気分になった。（太一）	○ 「そう大な音楽を聞いているような気分」とは、どういう意味なんだろう。	定義 海の広さ、海の豊かさ、海のめぐみ、海の素晴らしさを、体全体で感じている様子。
本当に <u>一人前の漁師</u> にはなれないのだと、太一は泣きそうになりながら思う。（太一）	○ 「一人前の漁師」とは、どういう意味なんだろう。	定義 「村一番の漁師」とは違って、大きな魚、たくさんの魚をとる漁師。
こう思うことによって、太一は瀬の主を殺さないで済んだのだ。 （太一）	○ どうして、父のかたきのクエを殺さなかったのだろうか。	推理 父の言葉（海のめぐみ）や与吉じいさの教え（千びきに一びき・村一番の漁師）が、頭の中に浮かんだからだと思う。
大魚はこの <u>海の命</u> だと思えた。 （太一）	○ 「海の命」とは、どういう意味なんだろう。	定義 魚、魚のえさ、漁師、その家族など、「海」にかかわる全ての命。

海のいのち

立松 和平

起 父もその父も、その先ずつと顔も知らない父親たちが住んでいた海に、太一もまた住んでいた。季節や時間の流れとともに変わる海のどんな表情でも、太一は好きだった。

「ぼくは漁師になる。おとうといっしょに**海に出る**んだ。」

子供のころから、太一はこう言ってはばからなかった。

父は、もぐり漁師だった。潮の流れが速くて、だれにももぐれない瀬に、たった独りでもぐっては、岩かげにひそむクエをついてきた。ニメートルもある大物をしとめても、父は**自まんすることもなく言う**のだった。

「**海のめぐみだからなあ。**」

不漁の日が十日間続いても、父は**何も変わらなかつた**。

ある日父は、夕方になっても帰らなかつた。空っぽの父の船が瀬で見つかり、仲間の漁師が引き潮を待ってもぐつてみると、父は**ロープを体に巻いたまま、水中で事切れて**いた。ロープのもう一方の先には、光る**緑色の目**をしたクエがいたという。

父のもりを体につきさした瀬の主は、何人がかりで引こうと全く動かない。まるで岩のような魚だ。結局、ロープを切るしか方法はなかつたのだ。

承 中学校を卒業する年の夏、太一は、与吉じいさにでしにしてくれるようたのみに行つた。与吉じいさは、太一の父が死んだ瀬に、毎日一本づりに行つて**いる漁師**だった。

「わしも年じや。ずいぶん魚をとつてきたが、もう**魚を海に自然に遊ばせて**やりたくなつとる。」

「年を取つたのなら、ぼくをつえの代わりに使ってくれ。」

こうして太一は、無理やり与吉じいさのでしになつたのだ。

与吉じいさは、瀬に着くや、小イワシをつり針にかけて水に投げる。それから、ゆつくりと糸をた

▼題名読み：「海のいのち」ってなんだろう？

↓魚、貝、プランクトン、海の生物全て、人間も入れて海に関わるもの全てのいのち。

▼なぜ、「いのち」とひらがななんだろう？

設定 瀬の主にやぶれた太一の父

○父もその父も↓先祖代々、またこれからの子孫代々、ずっと海と共生

○太一もまた↓太一も海と共生する運命

○**海に出る**…海で生きる↓海を基盤として生活する

▼「どんな表情の海が好き」ということは？

▼**自まんすることもなく言う**のだった。…父はどんな性格？↓魚の大きさや量で競わない漁師、魚を「海のめぐみ」と考えている。

▼「**海のめぐみ**だからなあ。」…「めぐみ」とはおくりもの。魚は取るものではなく海から与えられるもの↓父の海の対する考え方

【発問】なぜ、「父は**何も変わらなかつた**」のか？↓魚は「海のめぐみ（海から与えられるもの）」だから、一匹も取れない日があつて当然。

【発問】なぜ、ロープを切つて助かろうとしなかつたのか？↓命をかけてでもクエをとりたかつたのか？↓クエと戦い敗れて「死ぬ」ことも「海に生きる」ことなのか

○緑色の目…後の「青い目」との関連

展開 与吉じいさに弟子入りする太一（展開の第一場面）

▼与吉じいさにでし…なぜ、年老いた、それも「もぐり漁師」でなく「一本づり」の与吉じいさにでし入りしたのか？↓父の死んだ瀬で漁をしているから↓いつか父の瀬で漁を↓父と与吉じいさの関係は？

▼**魚を海に自然に遊ばせて**…魚はもともと取るものではなく海で泳ぐもの（自然）、それを人間が生きてするために必要な分だけ分けてもらう↓「海のめぐみ」（太一の父の考え方）与吉じいさの海に対する考え

○なぜ、弟子入りしたのか？↓父のかたきをうつため？

ぐつていくと、ぬれた金色の光をはね返して、五十センチもあるタイが上がってきた。バタバタ、バタバタと、タイが暴れて尾で甲板を打つ音が、船全体を共鳴させている。

太一は、なかなかつり糸をにぎらせてもらえなかった。つり針にえさを付け、上がってきた魚からつり針を外す仕事ばかりだ。つりをしながら、与吉じいさは独り言のように語ってくれた。

「千びきに一びき」でいいんだ。千びきいるうち一びきをつれば、ずっとこの海で生きていけるよ。」

与吉じいさは、毎日タイを二十びきとると、もう道具をかたづけた。

季節によつて、タイがイサキになつたりブリになつたりした。

でしになつて何年もたつたある朝、いつものように同じ瀬に漁に出た太一に向かつて、与吉じいさはふつと声をもらした。そのころには与吉じいさは船に乗ってこそきたが、作業はほとんど太一がやるようになっていた。

「自分では気づかないだろうが、おまえは村一番の漁師だよ。太一、ここはおまえの海だ。」

船に乗らなくなった与吉じいさの家に、太一は漁から帰ると毎日魚を届けに行つた。真夏のある日、与吉じいさは暑いのに毛布をのどまでかけてねむっていた。太一はすべてをさとつた。

「海に帰りましたか。与吉じいさ、心から感謝しております。おかげさまでぼくも海で生きられます。」

悲しみがふき上がつてきか、今の太一は自然な気持ちで顔の前に両手を合わせることができた。

父がそうであつたように、与吉じいさも海に帰つていったのだ。

ある日、母はこんなふうに言うのだった。

「おまえが、おとうの死んだ瀬にもぐると、いつ言い出すかと思うと、わたしはおそろしくて夜もねむれないよ。おまえの心の中が見えるようで。」

○独り言のように語ってくれた⇔独り言を語つた … あえて太一に言つた→自分の「海に対する考え方」を伝えたかった。

【発問】「千びきに一びきでいい」とは？

▶「千びきに一びきでいいんだ…むやみやたらに魚をとらない→生きていくのに必要な分だけ取る→そうすることで海の生態系のバランスがとれる→与吉じいさの「海に対する考え方」

▶「海で生きていける」→海で生活できる→収入を得ることが出来る。→「海のいのち」の一部□でしになつて何年もたつたある朝…場面の展開(時間的経過)→第三場面→「与吉じいさの死」

○同じ瀬：太一の父が死んだ瀬→毎日、太一は父が死んだ瀬に来ている→どんな気持ちだったのだろう？

【発問】「村一番の漁師」とはどんな漁師？

▶「村一番の漁師」→ここという村とは→村「生活する」所・「生きる」所→与吉じいさや太一にとつてはまさに「海」→「村一番の漁師」は「この海一番の漁師」→「千びきに一びきでいい」という与吉じいさの考え方をもつことができた漁師

▶「おまえの海」→おまえの→所有の「の」→おまえが「海」に対して責任をもつ→この「海」の全てのいのちを生かし続けなければならない。

▶「海に帰る」⇔「海に生きる」→父と与吉じいさは「海に帰り」、太一はこれから「海に生きる」→「海に生きる」とは、父がいう「海のめぐみ」(海から与えられるもの)や与吉じいさがいう「千びきに一びきでいい」(むやみにとらずに必要な分だけとる)という考え方をもつことで「海のいのち」(一部)になれる。

○おとうの死んだ瀬…毎日、太一は一本づりで父が死んだ瀬に来ている

【発問】母は、なぜ、おそろしくて夜もねむれないのか？

太一は、あらしさえもはね返すくっ強な若者になっていたのだ。太一は、そのたくましい背中に、母の悲しみさえも背負おうとしていたのである。

いつもの一本づりで、二十びきのイサキを早々ととった太一は、父が死んだあたりの瀬に船を進めた。

いかりを下ろし、海に飛びこんだ。はだに水の感しよくがここちよい。海中に棒になって差しこんだ光が、波の動きにつれ、かがやきながら交差する。耳には何も聞こえなかったが、太一はそうした大な音楽を聞いているような気分になった。とうとう父の海にやってきたのだ。

太一が瀬にもぐり続けて、ほぼ一年が過ぎた。父を最後に、もぐり漁師がいなくなったので、アワビもサザエもウニもたくさんいた。激しい潮の流れに守られるようにして二十キロぐらいのクエも見かけた。だが太一は興味を持てなかった。

追い求めているうちに、不意に夢は実現するものだ。

太一は海草のゆれる穴のおくに、青い宝石の目を見た。

海底の砂にもりをさして場所を見失わないようにしてから、太一は銀色にゆれる水面にうかんでいた。息を吸ってもどると、同じ所に同じ青い目がある。ひとみは黒いしんじゅのようだった。刃物のような歯が並んだ

灰色のくちびるは、ふくらんでいて大きい。魚がえらを動かすたび、水が動くのが分かった。岩そのものが魚のようだった。全体は見えないのだが、百五十キロは優にこえているだろう。

興奮しているながら、太一は冷静だった。これが自分の追い求めてきたまぼろしの魚、村一番のもぐり漁師だった父を破った瀬の主なのかもしれない。太一は鼻づらに向かつてもりをつき出すのだが、クエは動こうとはしない。そうしたままで時間が過ぎた。太一は、永遠にここにいられるような気さえた。しかし、息が苦しくなつて、またうかんでいく。

→父と同じ運命をたどるのか？

○二十びきのイサキを早々ととった…与吉いさと同じ行動→与吉いさの海に対する考え方
→「千びきに一びきでいい」

○海に飛びこんだ…父の死んだあたりの瀬に毎日来ているのに初めて飛びこんだ→これまでなぜ飛びこまなかったのか？→母のことばに関係？

山場 瀬の主との出会い

□ほぼ一年が過ぎたなことを考えていたのだろうか？→父をたおしたクエと会いたかった

○青い宝石の目・同じ青い目⇄第一場面の「緑の」目→同じクエ？▶興奮しているながら、太一は冷静だった。…なぜ、「興奮」していたのか？→追い求めてきた夢であるまぼろしの魚に出会えたから。…なぜ「冷静」でいられたのか？→

「村一番の漁師」(海のめぐみ・千びき

に一びきでいい)に成長していたから→太一はなんのためにクエを追い求めてきたのか？

父のかたきをうつため？それともクエを見るため？

○村一番のもぐり漁師…父は村一番のもぐり漁師⇄太一は村一番の漁師

○もりをつき出す⇄もりをつきさす

▶なぜ「クエは動こうとしない」のか？→太一の心情が分かっている？(冷静だった・もりをつき出す)○「殺されたがっているのだ」(断定)と思っただけだった⇄思っただけ…太一にとっては意外だった。→父と出会った時、クエは、どうだったのだろうか？

【補】これまで数限りなく魚を殺してきたのは何のために殺してきたのか…生活のため、生きていくのに必要な分だけ殺す→「千びきに一びき」「海のめぐみ」

もう一度もどってきても、瀬の主は全く動こうとはせず、太一を見ていた。おだやかな目だった。この大魚は自分に殺されたがっているのだと太一は思ったほどだった。これまで数限りなく魚を殺してきたのだが、こんな感情になったのは初めてだ。この魚をとらなければ、本当に一人前の漁師にはなれないのだと、太一は泣きそうになりながら思う。

水の中で太一はふつとほほえみ、口から銀のあぶくを出した。もりの刃先を足の方にだけ、クエに向かってもう一度えがをおを作った。

「おとう、ここにおられたのですか。また、会いに来ますから。」

こう思うことによつて、太一は瀬の主を殺さないで済んだのだ。大魚はこの海のいのちだと思えた。

結やがて、太一は村のむすめと結こんし、子供を四人育てた。男と女と二人ずつで、みんな元気でやさしい子供たちだった。母は、おだやかで満ち足りた、美しいおばあさんになった。

太一は村一番の漁師であり続けた。千びきに一びきしかとらないのだから、海のいのちは全く変わらない。巨大なクエを岩の穴で見かけたのにもりを打たなかったことは、もちろん太一は生がいだれにも話さなかった

【補】こんな感情とは、どんな感情なのか？…自分に殺されたがっている→「生きていくのに必要な分」ではなく、ちがう目的（父のかたき・感情的に）で殺すことを正当化しようとしている気持ち。

○本当の一人前の漁師⇄村一番の漁師…どちがうのか？→「一人前の漁師」…父を倒したクエをうちとることで父を超える漁師「村一番の漁師」…「海のめぐみ・千びきに一びきでいい」という海と共生する考え方をもった漁師

○ふつとほほえみ…この間に何があったのか。

何が太一をほほえませたのか？ 村一番の漁師

に育っていた太一→父や与吉じいさの言葉思い出した→だから「もう一度えがをおを作った」

【発問】なぜ、太一は、父のかたきであるクエにもりをうたなかったのだろうか？

▼こう思うことで…「クエ」と「おとう」の姿を重ねる→父のかたきのクエを愛している父とすることで殺さないで済んだ（済んだという言葉の使いかた…初めから殺す気はなかった？殺す気でいた？）→二つのいのちは等価→同じ海に生きる 海のいのち

結末 海で生きる太一とその家族

○子供を四人⇄父もその父も…先祖。子孫と永遠に海に生きる

○村一番の漁師→父や与吉じいさと同じ漁師…「海のめぐみ」「千びきに一びきでいい」という考え方

○海のいのちは全く変わらない…生態系のバランスがくずれずつと魚も人間も共存共生できる

▼だれにも話さなかった→なぜ話さなかったのか…話すと海の生態系のバランスがくずれるおそれが…

【発問】なぜ、もりをうたなかったことを生がいだれにも話さなかったのだろうか？